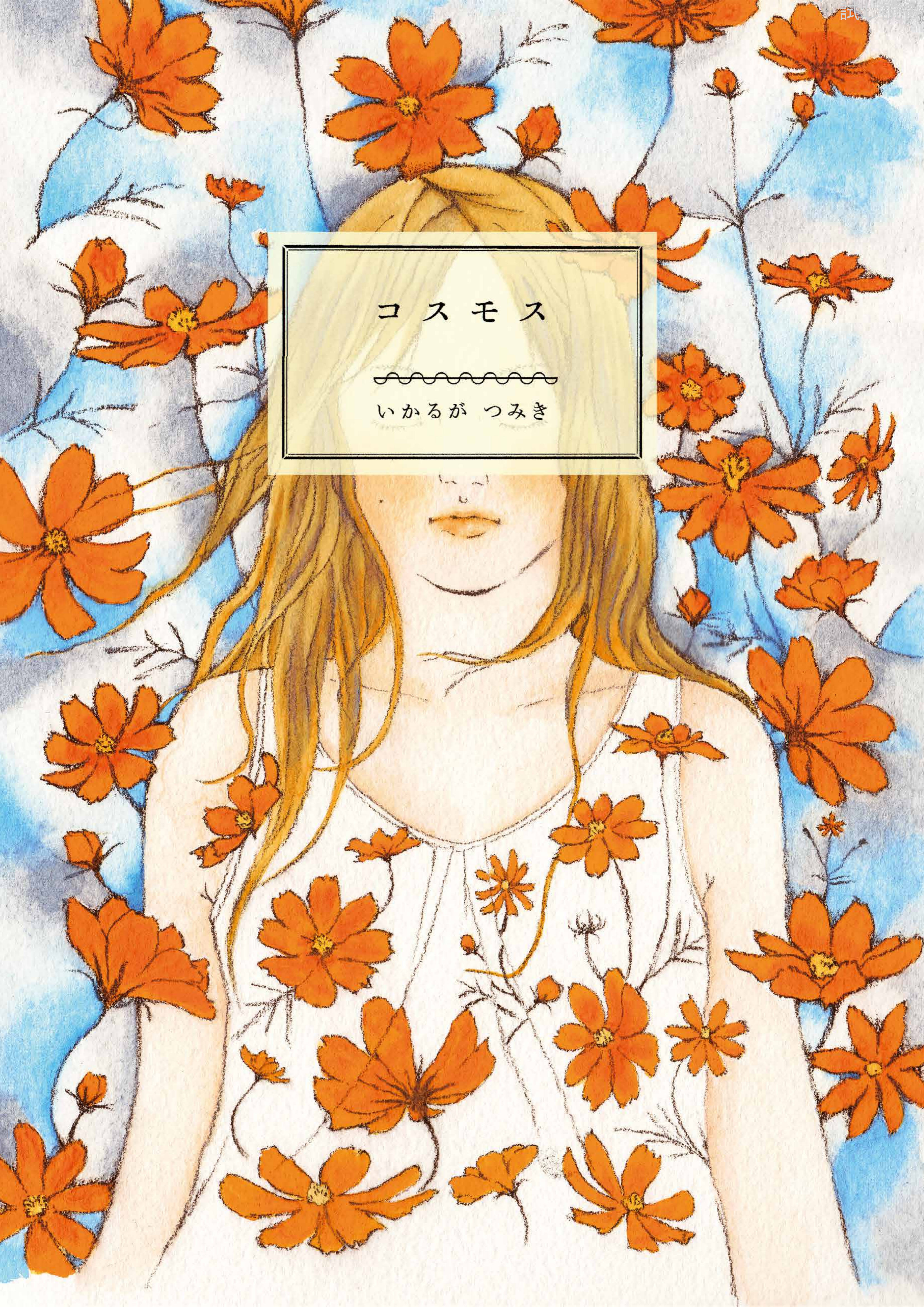


試し読み

コスモス

知古文庫

当ファイルを許可無く印刷またはインターネットを介して
第三者へ配布することを禁じます。



コスモス

~~~~~

いかるが つみぎ



もくじ

|  |          |    |             |    |
|--|----------|----|-------------|----|
|  | 燕        | 10 | デジタルフォトフレーム | 41 |
|  | 高架下      | 13 | アネモネ        | 43 |
|  | 物置       | 15 | バーコード抄      | 45 |
|  | 惜別       | 17 | 天然系         | 52 |
|  | プロポーズ    | 20 | カルア・ミルク     | 55 |
|  | 二倍の女     | 21 | サンプルテキスト    | 58 |
|  | イミテーション  | 24 | 妄想課金        | 60 |
|  | 雨男、雨女、雨犬 | 29 | コスモス        | 67 |
|  | 猫カフェ     | 33 | (無題)        | 71 |
|  | プレゼント    | 35 | 電気ウナギの恋     | 89 |
|  | ルチャドール   | 39 | たとえ話        | 90 |



コ  
ス  
モ  
ス

猫カフェ  
ねこかふえ

「今日云わなければいけないと思っただ」僕は思いきった。思いきりすぎて、きつと、怖い顔をしていたと思う。だって、怪訝そうな顔をされたから。にやーん。「どうしたの？」冷静にそう返されたところで、僕も冷静に戻った。のぼせていると、舌が回らなくなるんだ。こういうことは、ちゃんと伝えなきゃいけない。「ごめん……、ちよつと緊張してしまつて」気がつく、君の肩を思いきり掴んでいた。にやーん。手を離すと、君は少し笑つて、僕の顔を振りかえつた。「なにか、話したいことがあるの？」いつだつて、僕は君のペースに乗せられている。僕がこういうふうに舞いあがつたとき、君が諫めてくれる。にやーん。僕は、もういちど、云うべきこと葉を頭の中で整理する。君は僕の顔を見詰めた儘、少しじれつたような顔をする。にやーん。僕が道に迷つたとき、君が傍そばにいてくれれば、勇気がでるんだ。にやーん。僕がく

じけそうになったとき、君が傍そばにいてくれれば、がんばれるんだ。にやーん。そして、僕には夢がある。にやーん。おおきな夢だ。にやーん。君を幸せにする。にやーん。「僕と、」にやーん。「僕と結婚してくれ」にやーん。にやーん。みやーん……

「それって、ここで云わなきゃならない話？」  
全くその通りにやーん……



## 妄想課金

もうそうかきん

吊り革につかまった腕が、武骨という程荒々しくもないが、だけど力強くたくましい。体軀からみても、ちょうどいいバランス。あの腕に抱きしめられたのなら、さぞ気持ちいいことだろうな、なんて、顔は文庫に向けた儘、メガネの端から覗き見していた。

「想像するだけならタダだし……」なんて思っていたら、請求書が届いた。  
1万3千円也。

妄想していた内容からして、額面は妥当かも知れない。取り敢えず、給料日まで待とうと思つた。

次の日に、あの腕の人はいなかった。代わりに、少し歳をとった男が2つめの駅から乗りこ

んできて、隣の吊り革につかまった。

少しかさついた指をしていたが、皺しわが深く刻まれ、くつきりとしたコントラストをみせる。背広を着込んでいるが、なにか手作業をする仕事なのだろう。指の動きに無駄がない。新聞を見詰めるまなざしは、やはりなにかの職人、活字活字を、ぶれることなく、選別するかのよう  
に鋭く追っている。

妄想……

請求書は夜に届いた。

額面は昨日よりも高かった。これは、タレントのギャランティーが一律でないように、人によつて変わるといふことなのか。きつと、昨日の男の人よりもいい仕事をするにちがいない。

翌朝、ポストの中に追加料金の請求書が入っていた。

その朝は、電車に乗ると私のまわりに、なん人か、中学生のグループが乗りこんできた。さすがにそういう趣味はない。中に、ひと組の男の子と女の子が、つきあっているのか、まだ意識し合っているだけなのか、少し恥ずかしそうに頬あかを赧うっむらめて並んでいる。俯うつむいた姿が初々しい。

妄想なんてできるか。

家に帰って、請求書に書かれていた番号へ電話した。

「すみません……明日は、もう少しまともなものを派遣しますので……」  
お金を払うのだから、もつともだ。

「ただし、指名料が発生します」

次の日の電車の中にいたのは、私と同世代のOLたち。もう、なにがなんだか判らない。頭  
にきて、お金なんか払ってやるものか、と思っていたが、どうやら電車が遅延しているらしい。  
私は、遅れていた、いつもより一本前の電車に乗っているようだった。そこで、途中の駅で一  
度降りて、いつも電車へ乗り換えることにした。

遅延している電車だけあって、満員だった。

迷惑なのは判っていたが、いつもの吊り革の場所へ、私は人を押しつけついでに。さあ、  
今日は素晴らしい妄想ができるに違いない。

だけど困った。

これだけ混んでしまつては、隣にくる人の、顔どころか、姿さえみえない。背中からぐ  
いぐい押され、身体の向きを変えることもできない。

その時気づいた、太腿を触られてる。

なんてやつらだ。これは、また、種類が違う。確かに、この状況下では、妄想を掻きたてる正しい手段かもしれない。しかし、ユーザーの意志を考慮していない、いきすぎたサービスだ。憤慨。すぐに例の番号へ電話を掛けた。

「本日は事情が事情でしたので、派遣を取りやめさせていたいただきました。今日現れたのは、別の業者のかたかと思われます……」  
確かに。考えてみれば、ポストに請求書が入っていない。ひとまず落ち着いて……今日は不運だったとあきらめることにした。

翌日。

この日はなぜか車内がすいていた。木曜日にもなれば疲れが溜まる。私は迷うことなく、あいた席に腰掛け、目を閉じ眠ってしまった。

請求書には指名料だけ記載されていた。

どうして、こう、うまくいかないのだろう。今日は金曜日。25日は日曜日だから、今日、給料が振りこまれている筈。

ならば、いつそのこと、気絶してしまうくらいのも、もの凄い妄想をしてやろう。自分へのご

褒美——その男は私より少し若めで、細めな印象もしたが、たくましい口元をしていて、なに  
より、今までの男より清潔感があつた。耳元で、少しひそめて「突然すみません、」声は体つき  
よりも低く、心地いい響きかた。「いつもあなたのこと見ていたんです、」瞼に焼きつけた通り  
トレースしてくる台詞。「怖がらせてしまったのなら、すみません、」少しくらいの恐怖は、却つ  
てスパイスのようなもの。「唯……伝えたかったです、」そう。情熱は少しずつボルテージを  
あげていくもの。ただし、乗り換えまでの30分で収めて。「よかつたら……、」悪いことなんて  
なにもない。この、私の中の世界でなら、なにをしたって構わないのよ。「今度、お食事でも」  
居眠りから落ちたのかと思つた。違う。今度？ なにを云っているの？ あなたとは、今、  
この電車の中だけの関係で……なんて思つていたけど、その男は、まっすぐに私の目を見詰め、  
確かにそこに佇つていた。

よく見れば、好みだけならもつと私のタイプの男が、話しかけてきた男のうしろで、苦虫を  
噛み潰したような顔をしてうろたえている。

すると、この人は……現実？

応えのない私に、眉が少し悲しそうに歪んだので、私は思わず、はい……よかつたら……今  
夜……、

時に、現実には妄想よりも夢のようであり、ともすると、なにかもが境い目のない夢のように思えてしまう。ふわふわと感覚の削がれた、中毒のような状態に陥る。

その日、電車の中で渡したアドレスに、すぐにレストランの場所を送ってきた。高いお店ではなかった。だけど、時間どおりに席に座って待っていた彼の印象と、気取らず、手が届かない程洒落すぎている、小気味のいい店の雰囲気、いつそう好感を高めた。

誠実な話。誠実な恋。誠実な関係。

彼は、私の部屋に置いてあった請求書を見て、「こすい商売だよ」と破り捨てた。

それからの日々はしあわせだった。半年後にはふたりで住み、一年後には誓いあった。

ふたりの部屋には、リネンのクロスを掛けた、ささやかなソファを買って。

寄り添って観られるように、少しちいさめのテレビを置いて。

壁にはモダンな絵を飾って。

のんびりと歩く、ふわふわの白い犬を。

週末のドライブのために車を。

落ち着いたら行こうと約束していた、ヴェニスまでの旅行券。

誕生日には、欲しがっていた腕時計。

クリスマスには万年筆。

仕事で疲れたときのためにマッサージ・チェア。

新調したスーツ。

それに合わせて靴。

ブランドものの革の財布。

忘れていた、車検の代金。

彼は現実で、業者でも、詐欺師でもない。本当に本気で愛しあつた。だけど諸々の理由で私たちは別れた。結局、最後にはなににも残らなかつたんだ。

まあ、なにしろ、全部妄想だし。

ぴろぴろ　　ぴろぴろ

ぴろぴろの話しよう。

さめざめ雨の降る中、しんしんと更けていく夜、りんりん鳴った電話をひらひら手の内で踊らせて、「もしもし」——彼女だ。

彼女はぴかぴかしたミラー・ボールがくるくる回るつるつるのホールで、ばきばきに叩くりズムのドラム、ぎらぎらした男たちと、つやつやした女のあいだを、ふわふわと——Angel、舞うように、さらさらした髪、そろそろと慎重なステップから、どんどん早まるがんがんなビートへ、ぽんぽん変わるサウンドを、うねうね腰をくねらせながら、ゆらゆら漂っていた。

まず、きんきんに冷えたビールをオーダー。もじもじしたチキンなボーイが、とろとろして



いたもんだから、「のろのろしてんじやねえよ」ってごうごうと罵ったら、「まあまあ」なんて云われちゃった。

「おいおい、おめえ、そのねじねじしたスカーフ、ちよつとけばけばしてんじやねえか？」って、彼女に云ったら、急につんつんした態度でばちばち俺の頬を叩いて、づかづかどつかへいつちまった。

じろじろ見てるヤツら。俺ア、いらいらして、ぽきぽき指を鳴らしながら、「なに見てんだ！」って、がつかつ前のめりで、ぺらぺら捲したててやったぜ。

また来やがった、がりがりのチキン・ボーイ。取り敢えず、こいつのふさふさした髪をぐりぐり掴んで、ずるずる引きずり廻す——みせしめだ。

持っていたスナックをざくざく頬ばりながら、どくどく脈うつボーイのべとべとしたコメカミを、めりめり締めあげ、鼻たかだかにホールのヤツら、もろもろ威嚇する。

「やめて！」——彼女。

うるうる潤んだ瞳。俺の胸板をばしばし叩きながら、「どうしてこんなことするの！」と、きつきつのホット・パンツからぴちぴちの脚をむちむちさせながら、詰<sup>な</sup>詰る。

もう力つきてぐねぐね倒れこむ、ボーイ。

しくしく泣いてくたくたになった、彼女。

酒が廻ってふらふらになった、俺。

ぬめぬめした床に、割れてとげとげしたグラスと、どろどろ流れだす酒。

そこへ突然、ほろほろ鳥！——啼いた！「ぴろぴろー」